



## 新任教員対象FDプログラムの取組と成果

林 泰子、沖 裕貴

本学では、2008年度、文部科学省の教育GPに『教育の質を保証する教員職能開発と大学連携』が採択されました。それを原資に設立された大学間ネットワーク「全国私立大学FD連携フォーラム\*1」を通して「実践的FDプログラム」が開発され、2009年度から本学の新任教員（専任歴3年未満の新任教員）を対象に研修を実施しています。2011年3月には、所定の研修を終えた第1期修了教員11名に、修了証が授与されました。

### 1 実践的FDプログラムのねらいと概要

実践的FDプログラムとは、大学教員に求められる教授・学習支援能力（表1）の育成を到達目標とし、教員が自らの授業を専門分野と教学の観点から省察することができる知識、技能、態度、なかでもアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するための研修講座の総称です。現在、オンデマンド講義（VOD）41本、ワークショップ（WS）12本が開発・利

用されています。その内容は、①主に教育関連学に関する理論、②授業技術やコミュニケーション技術に関するワークショップ、③機構教員や先輩教員、受講生同士による日常的なコンサルテーションの三本柱から構成されています。

### 2 新任教員対象FDプログラム

新任教員対象FDプログラムとは、合計53本の実践的FDプログラム

\*1 全国私立大学FD連携フォーラムは、FDの推進を目指す全国の中規模以上の私立大学の連携体で、関西大学、関西学院大学、慶應義塾大学、中央大学、同志社大学、法政大学、明治大学、立教大学、早稲田大学、立命館大学の幹事校を中心に全国の主要な私立大学23大学が加盟している（2011年3月時点）。

## CONTENTS

- P1 新任教員対象FDプログラムの取組と成果
- P3 新任教員対象FDプログラム修了者の声
- P4 学生同士（ピア）による主体的で創造的な新しい「学び」のスタイル  
衣笠キャンパス図書館に新しい学びの空間「びあら」が誕生
- P5 学部・教学機関の教育的取組紹介
- P6 新規着任された教員のご紹介
- P7 第三者の意見紹介  
報告 学生FDのひろば開催報告
- P8 2010年度 教育開発推進機構 主催イベント一覧  
「学生FDサミット・2011夏」開催のお知らせ  
「立命館高等教育研究」第11号を発行しました

の講座の中から新任教員のために特別に抽出された25本の研修講座群を意味します。

新任教員は2年間（最長4年間）で、大学教員に求められる教授・学習支援能力の育成に関するVOD15本の受講とレポート課題の提出、およびWS10本の参加が求められます（表2）。さらに機構教員による日常的な教育コンサルテーションを受け、個々の教員が抱えている授業や学生との接し方などの、教育上の不安や問題を解決していきます。

修了は、オンデマンド講義とワークショップを6割以上受講していることを前提とし、最終課題である研修成果を結集したティーチング・ポートフォリオ（TP）を作成、提出することにより認定されます。

### 3 取組の成果

昨年度初めて輩出した第1期修了教員のプログラムに対する評価は以下のとおりです。

(1) ワークショップに対する評価（学内新任教員対象、全10回、延参加人数196名）

ワークショップ受講後に毎回実施する事後評価アンケート（5点満点）の結果、満足度においては4.3点、到達目標の達成度では4.2点と、それぞれ高い評価を得ることができました。ただし、併せてとった実施時期に対する評価は少し低く、その原因として10本の各ワークショップの開催機会が2年の研修期間を通して1回しかないため、受講者の業務などの日程調整が困難な場合は参加できないという問題が浮かび上がってきました。受講者の参加頻度を高めるためにも、受講期間や実施回数を見直す必要性が示唆されました。



表1 実践的FDプログラムが保証する教授・学習支援能力

項目	教授・学習支援能力
1 学習活動の設計	1-1 教授と学習に関する一般的理論を理解する。
	1-2 学生はいかに学ぶかを理解したコース設計ができる。
	1-3 学習者中心の授業の設計と計画ができる。
	1-4 学習者中心の授業に必要な目標設定とその適切な記述ができる。
	1-5 学習者中心の授業において適切な評価観点の設定と評価方法の選択ができる。
	1-6 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の設計と計画ができる。
2 教授および学習活動の展開	2-1 高等教育において学習者中心の授業を実践するための教授・学習方略、方術を理解する。
	2-2 学習を支援する様々なテクノロジーの特徴、利用方法を理解し、授業に用いる。
	2-3 学習展開に応じて柔軟に授業を修正・転換できる。
	2-4 学生と協同して授業を進めることに意欲をもつ。
	2-5 専門分野における調査研究や実践のプロセス、成果を積極的に授業に取り込む。
	2-6 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実施ができる。

(2) 教授・学習支援能力の修得度に対する自己評価（2009年度着任・2010年度修了者および受講が比較的良好な受講者対象、有効回答50%、10名）

教授・学習支援能力として挙げられる①学習活動の設計、②教授および学習活動の展開、③授業の質の保証、④効果的な学習環境の開発、⑤自己の専門性の継続的発展、⑥大学特有の必要とされる力の6つの観点（25項目）の修得度については、4件法（1点：「そう思わない」～4点：「とてもそう思う」）で受講者から次のような評価を得られました。

6つの観点25項目のうち17項目で3.0点以上の自己評価平均得点を得られ、とくに③授業の質の保証では、「3-1 授業・学習方略、方術に応じた教育効果の評価方法が理解できた」（3.3点）、「3-2 客観的かつ厳格な成績評価ができる」（3.3点）、「3-4 自らの授業や実践を省察し、改善することができる」（3.3点）、⑤自己の専門性の継続的発展では、「5-1 学生の多様性を認め、尊重しようとしている」（3.4点）、「5-3 大学教員集団の一員として働くことができる」（3.4点）、「5-4 常に高等教育や教授法に関する新しい知識を取り入れることに努めようとしている」（3.5点）と、高い修得度が見られました。さらにプログラムの平均総合評価は4点満点中3.4点と高評価で、本取組のねらいは概ね達成されたといえるでしょう。

### 4 今後の課題と展望

受講者に対する評価と併せて行われた運営主体ならびに外部評価委員による自己点検・評価結果でもプログラムの妥当性・有効性が認められ、大学教員に求められる教授・学習支援能力の育成を目指した本取組は、概ね成功したといえます。

一方、最長4年間と研修期間に猶予を設けていますが、2年間でのプログラム修了率が28.2%という当初期待していた数値より低い結果となりました。授業や業務の合間を縫ってプログラムを受講する新任教員にとっては、時間調整や研修負荷が大きな問題であることは否めないところです。

今後の課題として、より受講しやすい環境を整備すべく、講座編成の精査・検討のうえでプログラム運用の柔軟化を図るとともに、受講へのモチベーション向上のための仕組みを学内に働きかける必要があると考えられます。それらの改善をふまえて、学内の他の教職員や大学教員を目指す大学院生、さらに他大学への汎用性を考慮した取組に発展させていきたいと思っています。皆様方からプログラムに対する忌憚のないご意見が頂戴できればこの上ない幸甚です。

項目	教授・学習支援能力
3 授業の質の保証	3-1 教授・学習方略、方術に応じた教育効果の評価方法を理解する。
	3-2 客観的かつ厳格な成績評価ができる。
	3-3 教育効果の評価結果について学生に効果的なフィードバックができる。
	3-4 自らの授業や実践を省察し、改善することができる。
	3-5 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の評価ができる。
4 効果的な学習環境および学習支援環境の開発	4-1 学習コミュニティの形成を促進する。
	4-2 様々なメディアやツールを活用し、効果的な学習環境の整備や学習支援ができる。
	4-3 学習支援のためのツールや環境の開発ができる。
5 自己の専門性の継続的発展	5-1 学生の多様性を認め、尊重する。
	5-2 自らのキャリアの設計との継続的な開発に努める。
	5-3 大学教員集団の一員として働く。
	5-4 常に高等教育や教授法に関する新しい知識を取り入れることに努める。
6 大学特有の必要とされる力	6-1 立命館大学の教学について理解する。

表2 新任教員対象FDプログラム講座一覧

分野	種類	テーマ
立命館学Ⅰ	VOD	立命館大学の教育と文化
高等教育論Ⅰ	VOD	現代の高等教育
高等教育論Ⅲ	VOD	大学改革とFD研究
高等教育論Ⅳ	VOD	大学評価論
教授学習理論Ⅰ	VOD	教授・学習の理論と教育実践(1)
教授学習理論Ⅱ	VOD	教授・学習の理論と教育実践(2)
教授学習理論演習Ⅰ	WS	アクティブ・ラーニングの方法と実践 (ピア・サポーターの活用を中心に)
教授学習理論演習Ⅱ	WS	アクティブ・ラーニングの方法と実践 (ICTの活用を中心に)
教育方法論Ⅰ	VOD	教育工学の観点から
教育方法論Ⅱ	VOD	高等教育における授業技術
教育方法論演習Ⅱ	WS	良い授業のための留意点(話し言葉に着目して)
教育方法論演習Ⅲ	WS	良い授業のための留意点 (非言語、視覚情報の応用)

分野	種類	テーマ
授業設計論Ⅰ	VOD	大学の授業の設計
授業設計論演習Ⅰ	WS	シラバスと授業の到達目標の書き方
授業設計論演習Ⅱ	WS	強制連結法による授業設計
授業設計論演習Ⅲ	WS	マイクロ・ティーチングと評価
教育評価論Ⅰ	VOD	成績評価の意味と方法
心理学Ⅰ	VOD	青年期の心理
心理学演習Ⅰ	WS	聴き手に求められる力
心理学Ⅱ	VOD	発達の原理と各段階の特性
心理学Ⅲ	VOD	臨床心理学の基礎と応用
心理学演習Ⅱ	WS	相手の気持ちに立って話をする力(犬・バラ法)
心理学演習Ⅲ	WS	アサーション・トレーニング
大学管理運営Ⅰ	VOD	大学教職員のための大学管理運営基礎
大学管理運営Ⅱ	VOD	近年の大学改革の進展を踏まえた大学管理運営 の新たな発想

## ▶ 新任教員対象FDプログラム修了者の声

修了者の声  
1

平口 良司 先生(経営学部 准教授)  
2009年度着任-2010年度修了

私は2009年4月から2年間、FDプログラムを受講し、多くの事を学びました。学んだ事は、授業前、授業中、授業後の3つに分けることができます。まず、授業前に関しては、シラバスの役割、そして到達目標をまず定めそれに必要なものは何かを次に考えて授業を組む重要性を学びました。以前の私のシラバスは、教科書の章だてにただ沿っただけのものでした。今は、授業を通して学生にどうなってほしいかをまず考え、そのために重要な事項を考えてからシラバスを作るようになりました。

次に、授業中に関しては、学生とのコミュニケーションの取り方について、無言面接という取組から学びました。聞く態度とは話す行為と同じぐらい重要だということを知りました。ゼミでは各個人に問いかける場面が多いのですが、まずちゃんとした態度で聞くよう努めるようになりました。

第3に、授業後に関しては授業評価をどう授業改善につなげるかということ、ティーチング・ポートフォリオの作成を通して学びました。自分がどのような授業を行ってきたか、そしてその授業にはどのような問題があり、それをどう改善すべきか、冷静に考えることができました。教育コンサルタントの林 徳治先生には2度にわたり個人面談をしていただき、有意義な時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、充実したプログラムを提供して下さった教育開発推進機構の皆様にご感謝を申し上げます。ありがとうございます。

修了者の声  
2

安藤 妙子 先生(理工学部 准教授)  
2009年度着任-2010年度修了

立命館大学着任早々、本プログラムを受講する機会を得られたことに心より感謝しております。一方で達成感とともに、2年間のプログラムを無事に終えることができ、正直ほっとしています。大学にも授業にも慣れていない着任直後は、レポート課題の提出やワークショップへの参加を負担に感じることもありましたが、しかし一方で、例えばシラバスの作成方法やアクティブ・ラーニングの実施法など、授業ですぐに活用できる内容もあり、非常に有益でした。そして何よりも、着任当初教育について初心者だった私が、“学習者中心”という考え方をはじめ、“教える”とはどういうことかなど、さまざまなことを学ぶことで教員(教育者)としての自覚を得たことは、非常に重要なことであると考えます。

本プログラムは、教育経験の浅い人を一定のレベルに引き上げるためのプログラムであり、プロフェッショナルになるうえで基礎となる部分であると思います。何事に対しても言えることですが、経験や知識を積み上げて成長していくには、まず十分な基礎が必要です。基礎となる部分が固ければ固いほど、その上に多くのことを積み重ねていくことができます。今回、私はこのプログラムで基礎となる部分を学びましたので、今後、そのうえにさまざまな知識や経験を積み上げ、自分なりに発展させていきたいと考えています。

最後に、今後、私達第一期生が手にしたこの修了証が、学内外で広く認識され、通用するものとなることを願っています。

2011年度より、本学の教員・職員の皆様にも本プログラムのVODとWSを公開します。  
それぞれ申込が必要です。詳細は立命館大学教育開発推進機構のホームページをご確認ください。

[http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/ac/itl/teacher/teacher\\_seminar.html](http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/ac/itl/teacher/teacher_seminar.html)

# 「学生同士（ピア）による主体的で創造的な新しい『学び』のスタイル」

## 衣笠キャンパス図書館に新しい学びの空間「ぴあら」が誕生

近年、これまでの大学教育の主流であった「知識の伝達」から「知識の創造・自主的な学び」という、新たなパラダイムの導入とサポートが求められています。そうした変化に伴い、本学では2011年4月より、衣笠キャンパス図書館内にラーニング・コモンズとしての機能を兼ね備えた、新しい学習空間「ピア・ラーニングルーム（呼称:ぴあら）」を開設しました。図書館内に設置された「ぴあら」の様々な仕組みは、従来の図書館のイメージが持つ静的な学習空間のあり方から、ダイナミックで能動的な学びの場となるよう、設計されています。

### ◆ 呼称「ぴあら」のコンセプト

「ぴあら」という呼称には、より学生がこの空間に親しみを持ち、身近な日常のアクティブな学びに活用してもらいたいという思いがあります。「仲間とともに学ぶ楽しさ」や「学生どうし（ぴあ: Peer）による主体的で創造的な新しい学びのスタイル」を通じて、「主体的な学習者としての学びの転換を促すこと」「仲間（ぴあ: Peer）とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」これが「ぴあら」のコンセプトです。また、ロゴは、本学学部学生によってデザインされ、「仲間（ぴあ: Peer）とともに学ぶことで得る、ひらめき・発見」をイメージしています。



### ■ 施設とサポート概要（座席総数約100席）

現在、「ぴあら」には、以下のようなエリアや機材、サービス・サポート等が提供されており、グループ学習やアクティブラーニングを中心に、常に多くの学生に利用されています。

- 「グループワーク」エリア: グループ学習用大型ディスプレイ付パソコン9台、可搬型プロジェクター複数台、スキャナ2台
- 「パソコン」エリア: 情報検索やメールチェックなど短時間利用パソコン20台、プリンター1台
- 「プレゼンテーションルーム」: 大型スクリーンとプロジェクター、発表者用の演台、8組の机・椅子
- 「IT・情報検索サポートカウンター」: ぴあらスタッフが常駐
- 「ノートパソコン貸出カウンター」: 無線LAN対応 図書館内利用限定 90台
- 「各種講座・セミナー企画実施スペース」
- その他の機器・備品: 大型ディスプレイ付パソコン、プロジェクター、スキャナ、ネットワーク上の会議室(予定)、ホワイトボード、その他

「ぴあら」のグループ学習エリアの机は、全てが可動式であり、学生はそれぞれの学びに応じて自由な形を創り、学習を進めます。また、ここでは、グループによるディスカッションや、様々なメディアを駆使した知の創造が行われるよう、情報機器・機材等が準備されています。また、プレゼンテーション練習に特化した「プレゼンテーションルーム」は聞く側（聴衆）の反応を見ながら、しっかりとしたプレゼンテーションの練習が行える空間です。空間は「ぴあら」の一角をガラス張りで区切ったもので、学びが可視化（学びのモデル化）されるよう設計されています。

### ■ 利用状況

4月1日のオープン以降、大変盛況であり、定点観測による利用実績は図1の通りです。また、図書館内限定のノートPC貸出実績も図2の通り、多くの学生に利用されていることが分かります。また4月下旬頃以降は、昼から夕方までの時間帯でしばしば満員に近い状況が見られます。また、「ぴあら」の利用可能曜日・時間は、図書館と同じ設定であるため、遅くまでグループ学習をする様子もよく見られます。

### ■ 学習サポート状況

「ぴあら」には、サポートカウンターが設置され、現在は、本学を代表するピアサポート団体である「Rainbow Staff（情報系学生スタッフ）」、「Librally Staff（図書館スタッフ）」の学生複数名が交代で「ぴあらカウンター」に常駐し、「IT・情報検索サポート」、ノートパソコン貸出業務を行っています。

### ■ 各種講座・セミナー実施状況

グループ学習エリアは、時間を区切り、学部・ゼミ・全学機関等の単位における様々な教育実践や支援の要望に応じて、大きなセミナールームとしても利用出来るようになってきました。4、5月は、特に新入生を対象とした、

在学生企画（キャンパスライフデザイン・カフェ、『先輩から新入生におくる“充実した大学生活の送り方”』）や、大学での学びの態度を考えるワークショップ、アカデミックスキルズ（レポートの書き方）、スチューデントスキルズ（タイムマネジメント、ノートテイキング）といった初年次教育に関する講座・セミナーが提供されています。このように今後も全学的な学生支援の場として広く活用される事を願っています。



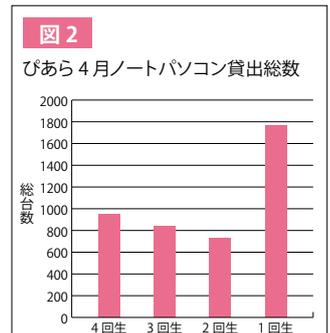
### ■ 今後の課題

国内外の先進的な取組を見れば、このようなコモンス化した学習空間の中や周辺に、具体的な学習支援に関わるサポーターやチューターを配置し、「アカデミックライティング」「数学」「統計」「各種外国語」を、理工系においては、これらに加えて「物理」「化学」「生物」等の学習支援が行われています。また、大学生活全般に渡るような「よろず相談の一次窓口（適切な窓口につなぐコンシェルジュ機能）」を提供する大学もあります。

「ぴあら」は、衣笠キャンパス図書館の限られたスペースを利用して、新しい学習空間の試行的開発の途上に着いたところと言えます。学生同士の学び合い（ピア・エデュケーション）の可能性を見出しつつ、専門家を配置した具体的な学習支援やピア・サポーターの育成が必要となってきます。そのためにも、学部との連携、また教学部門に限らない垣根を越えた部門との連携が重要な鍵となります。これから、各学部や様々な機関・部門と議論を重ね、新しい学習のコモンズ創りを目指したいと思います。



観測週(4/1-4/28)  
\*10時-20時の間、2時間感覚で定点観測した総数  
\*1グループは3名としてカウント



## 学部・教学機関の教育的取組紹介

### ◆『法学部 学びマップ』を探る

本紙 No.17で紹介した『法学部 学びマップ』（以下、『学びマップ』）の教員・職員・学生の関わりを探るべく、ヒアリングを行いました。

#### Q1.『学びマップ』の誕生経緯は？

A. 2008年度の五者懇談会（法学部執行部と学部自治会等との協議の場）を契機に、学生の学ぶ姿勢を具現化する必要がありました。その場での学生の質問で、どの科目を履修すれば、どのような進路就職につながるのか、という直線的な考えの質問が出されたためです。学生はシラバスだけを見ても自身の進路と照らし合わせて何を履修して良いのかが分かりづらく、履修の体系的性が学生に伝わっていませんでした。

#### Q2.ICT活用ではなく、紙媒体で実施した理由は？

A. 学生の自己の学びのプロセスを自覚できることや、学生生活の目標・行動計画の蓄積を目的としているために、ICT、紙の両者を検討対象としていました。しかし、システム構築などの面で、短期間でICTを活用した取組みを実施することが難しく、まずは紙で実施しました。また紙媒体だと、教室、小集団授業、ガイダンス等で使用できるという長所もあります。

#### Q3.職員の関わり方は？

A. 職員が履修要項に履修モデルを掲載すべく作成していた中、国際基督教大学の Academic Planning Handbookの事例を持っていた教員との会話から『学びマップ』のイメージが具現化しました。作成する上で、キャリア形成の取り組みについて他部課へヒアリングを実施しましたが、その際も教職員で行いました。また職員が作成までの日程を作成し、完成まで時間がない中、両者で『学びマップ』を完成させました。

#### Q4.学生への効果は？

A. ガイダンスの場へ履修要項を持参することが望ましいのですが、重いために持ってきません。『学びマップ』はそれほど分厚くないために持参してきます。学生は、民法の展開科目を民法と認識していない等、科目の体系的性を理解できていないところがありますが、『学びマップ』では科目名を記した系統図を掲載しているため、次の学びの展開を説明する上でも説明しやすかったです。

#### Q5.学生の参画は？

A. 五者懇談会等を通して学生に『学びマップ』の原稿確認を依頼しました。履修要項の何ページを参照すれば良いかを書いてほしいとの要望があり、反映させました。また表紙は書道部の法学部生に依頼しました。本取り組みはアナログなものであるため、敢えてアナログな手書きにすることで捨てられないように、表紙にはこだわりました。

#### Q6.将来展望は？

A. 当初の『学びマップ』では専門科目を中心に作成しましたが、五者懇談会の場で、教養教育が専門科目を学ぶ上で、どのように役立つのかも書いて欲しいという意見が出されました。教養科目を掲載すると外国語科目との関係も生じ、それだと履修要項と変わらなくなってしまいます。いかに『学びマップ』を学生の要望に沿ったものとし、活用してもらうかが今後の課題です。

### ◆経済学部 ゼミナール大会について

経済学部 教授 大川 隆夫

経済学部では、長きにわたり、学内でのプレゼンテーション能力&論文作成能力の陶冶を目指して「ゼミナール大会」を経済学部学生委員会の主催という形で実施しています。もともとは、基礎演習に参加する一回生を中心とした形で開催されていましたが、1998年度から3回生・4回生ゼミから2回生・3回生ゼミに移行したことを受け、2年間のゼミ活動の集大成というべきゼミ論文の内容を発表するという場としての機能を有するようになりました。加えて、参加者（グループ）も急増し、2009年度には322チーム、984人の参加となっています。内訳は1回生と3回生が中心で、それぞれ142チーム、116チームとなっています。

ゼミナール大会のスケジュールは次のようなものになっています。まず論文を各教員が審査し、コメントを付して論文を学生に返却します。学生は、付されたコメントを参考にして、予選に向けて論文内容を改善します。加えて、プレゼンテーションの原稿も作成します。この間のゼミナールの多くは、ゼミナール大会準備一色となっているといっても過言ではありません。

12月にゼミナール大会予選が行われます。テーマごとに分科会を設けています。分科会は3ないし4チームで構成されています。分科会ではプレゼンテーション能力を主に競います。先述の論文審査とプレゼンの審査を合わせて、本選に出るべきチームを決定します。

1月上旬に本選が開催されます。例年では10チームが参加しています。ここ数年、本選のレベルが高くなっており、本選には英語のみでのプレゼンを行うチームや、大学院修士レベルの内容を発表するチームも存在します。本選は、ローム記念館で行い、2回生ゼミ選択の活動中の一回生が観戦する中で行われています。

3回生の参加が増加したゼミナール大会は、ゼミナールを志望する一回生に、ゼミでの到達度を示すよい機会となっているだけでなく、経済学を学習するモチベーションを与える機会にもなっています。予選と本選を2回行うことから、本選への出場権を懸けて、参加者同士の切磋琢磨を促進しています。

なお、ゼミナール大会終了後、『立命館経済学学生論集』として、優秀賞以上を獲得した論文を中心に論文集にまとめております。

### ◆情報理工学部 新入生のためのスチューデントスキルプログラム実施

情報理工学部では2011年度新入生に対し、情報理工学部 亀井且有副学部長コーディネートののもと、新入生オリエンテーションと『情報理工学序論1』の授業時間に、「スチューデントスキル」に関する講義・グループワークを実施しました。スチューデントスキルとは、大学生活における時間管理や学習習慣、健康管理など、学生生活をすこすこしていく上で必要なスキルのことで、アカデミックスキル（レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等）とともに高等教育における初年次教育の大きな要素の一つです。

今回は新入生オリエンテーションで川那部隆司教育開発推進機構講師が「時間管理」と「メンタルヘルス」について、また岡田有司講師が『情報理工学序論1』の授業時間に「アサーション」についてプログラムを提供しました。「時間管理」では、充実した学生生活を送るために、大学生は時間を有意義に組み立てる力が必要なこ

とや、そのための時間管理のコツ、また予習復習も含めた1科目あたりに求められる勉強時間数について説明された後、「時間管理の自己診断テスト」が行われました。「メンタルヘルス」については、ストレスの種類やストレスマネジメントの方法、サポートルームの紹介などが行われました。その後、小集団クラスに分かれ各担当教員のもと、わかりやすいストレス傾向やストレス対処法に関する自己診断テストを行い、意見交換が行われました。

一方「アサーション」に関しては、大講義形式にて、相手のことを尊重しながら自分の気持ちをうまく伝える自己表現の方法について、ケーススタディや対応について意見交換を行うことを通して、円滑なコミュニケーションのあり方について考える機会となりました。

# 新規着任された教員のご紹介

## 教育開発推進機構 教授

### 倉石 寛 (くらいし ひろし)

長野県生まれ。東大文学部国史学科に進学、明治後期～大正期の社会史をテーマとした。折からの「1968 学生の叛乱」の中、研究よりも教育へと関心が移り、卒業後、神戸の灘中学校高等学校に就職。日本史および倫理・社会の教員となる。兵庫県の歴史教育・地域史研究や民間教育運動に携わり、授業方法や教材論の開発を目指した。1998年灘中高教頭になり、授業・学校運営とともに、兵庫県私学の副校長教頭会会長、私学審議会委員を勤め、私学経営・教員研修の企画運営に携わった。



#### 【研究経歴】

- ・日本史教育における授業方法の開拓とその共有。
- ・地域史やフィールドといった「現場」との関わりを一テーマとしてきた。
- ・中高六力年一貫教育に代表される、私学の中等教育における先進性・優越性の理論化。
- ・とりわけ、カリキュラム編成や教員の優秀さなど、総体としての「学校力」を実践的に追究。
- ・エリート教育について、その基礎としてのリーダー教育とそのための授業方法の変革を研究している。
- ・個人の研究というよりは、多くの思いを共有する人とのプラットフォームの構築による方向を模索している。

#### 【専門分野】

日本史教育の方法。教材編成やフィールドワークなど授業形態の探求と、それを通じたの青少年の歴史認識の研究。学校運営やカリキュラム編成、中でも私学経営の在り方および教員研修の企画運営を専門とした。

#### 【主な著書や論文】

- 『日本史用語事典』（共著 三省堂）
- 『兵庫歴史散歩』（共編著 草土出版）
- 『阪神間文化が生んだ灘中学』『10歳の選択－中学受験の教育論』

## 教育開発推進機構 講師

### 林 泰子 (はやし やすこ)

高等学校で教科「情報」を担当したことをきっかけに、「情報倫理・モラル」教育について研究してまいりました。倫理観・道徳観に着目し、道徳的判断力を取り入れた学習指導方法を開発し、情意面からアプローチした教育方法や教材開発に取り組んできました。また、教員研修などの講師経験では、丁寧な指導技術とコミュニケーション能力の大切さを再認識しました。昨今の危機に直面し困難に陥った時の、人々の思いやりと秩序ある姿を見て、他者や社会を考慮する高い道徳性をもって判断し行動できることは、人として非常に重要な資質であると実感しています。立命館大学から輩出する社会の担い手が「正義と倫理をもって活躍できる人間」として成長するための教育的支援に、微力ながら貢献できればと思っております。よろしくお願いたします。



#### 【研究経歴】

- |             |                             |
|-------------|-----------------------------|
| 2005年       | 滋賀大学大学院教育学研究科学校教育専攻情報教育専修修了 |
| 2004年～2008年 | 山口大学教育学部附属教育実践総合センター共同研究員   |
| 2006年～      | 山口大学理学部 非常勤講師               |
| 2008年～      | 滋賀短期大学 非常勤講師                |
| 2010年       | 立命館大学総合理工学院情報理工学部 非常勤講師     |

#### 【専門分野】

教育方法学 情報教育

#### 【主な著書や論文】

- ・『ユビキタス社会の情報モラル』共著（一橋出版、2005）
- ・『必携！相互理解を深めるコミュニケーション実践学』共著（ぎょうせい、2007）
- ・『元気がでる学び力』共著（ぎょうせい、2011）
- ・「大学生を対象とした実践的態度の育成を目指した情報モラル教育の研究」単著（滋賀大学大学院教育学研究科論文集第8号、2006）

## 教育開発推進機構 講師

### 川那部 隆司 (かわなべ たかし)

2004年に編入学して以来、学部から大学院まで本学で学んできました。博士論文では、子どもや大人が、日常生活の中で経験するさまざまな出来事から、どのような知識や概念を獲得しているのか、またそれらは学校で教えられる内容とどのような関係にあるのかについて研究を行いました。その中で、学習する人が何をどのように考えているかを正確にとらえた上で、教授を行うことが必要だと確信するに至りました。人間は理由や説明を求めずにはいられない生き物であり、考えていないようでも必ず何かを考えているのです。こうした観点に立って今後は、「学習者による主体的な学び」を可能にする大学教育を模索していきたいと思えます。



#### 【研究経歴】

- |             |                                   |
|-------------|-----------------------------------|
| 2006年       | 立命館大学文学部心理学科 卒業                   |
| 2007年       | ランカスター大学大学院心理学発達心理学コース 修了         |
| 2008年       | 立命館大学大学院文学研究科人文学専攻博士前期課程心理学専修 修了  |
| 2008年～2009年 | 大阪医専言語聴覚学科 非常勤講師                  |
| 2010年       | 大阪経済大学人間科学部 非常勤講師                 |
| 2011年       | 立命館大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程心理学専修 満期退 |

#### 【専門分野】

教育心理学、発達心理学、認知心理学

#### 【主な著書や論文】

- ・『子どもの論理と教科の論理からの介入』（共著『子どもの論理を活かす授業づくり－デザイン実験の教育実践心理学－』第6章 北大路書房 2010年）
- ・『The influence of exposure to scientific knowledge on intuitive knowledge of sound: in relation to material properties.』（科学教育研究 34巻3号 2010年）
- ・『A preliminary study of junior high school students' naive knowledge of light in the real science classes』（立命館人間科学研究 19号 2009年）

## 第三者の 意見紹介



# プログラムの外部評価と法政大学の事例紹介

川上 忠重 法政大学教育開発支援機構 FD推進センター長



### ●立命館大学 実践的FDプログラムについて

本取組みの内容は、大学教員に求められる教育力量や職能を育成するプログラムとなっており、大学の質保証の観点からも高く評価できるものである。また、受講者アンケートの結果からも大学教員の職能開発の啓発に十分効果があったと思われる。今後は、受講者の達成度の向上のため、プログラムの改善だけでなく、それらをさらに活用する仕掛けづくりの検討が望まれる。また、身につけた知識・技能が実際に授業にどれだけ反映されているかについては追跡調査による検証が必要であり、その結果を待つこととした。

次に、プログラムの大学間連携における汎用性という点においては、高等教育論、授業設計論、教育方法論をはじめとする一連のオンデマンド講義およびワークショップが多数、レベル別に開発されていることから有用性は非常に高いと考える。しかし、それらの運用は各大学における体制に依存しており、大学によってはなかなかスムーズに活用できないという課題がある。プログラムの今後の運用・展開にあたっては、大学間連携を通じた情報交換が必要・不可欠であり、さらなる取組みの継続により、汎用的な教授・学習支援能力の提案が可能となろう。ネットワークを利用した協働体制の構築を検討していきたい。

### ●法政大学におけるFDへの取組み

教育開発支援機構FD推進センターでは、FD (Faculty Development) を、『『自由と進歩』の建学の精神に基づく教育理念と教育目標を達成するためになされる、教育及び学びの質の向上を目的とした教員・職員・学生による組織的・継続的な取組みを、FDと定義する』とし、センター全体及びセンター内5つのプロジェクト(施策開発、FD推進、サーベイ&フィードバック、コミュニケーションおよび学習・教育支援)により、教員の質的向上を図るための方策を立案・実施し、学内・学外におけるFD関連情報の収集と分析及び教育の質的向上に向けた諸施策の提言、新任教員オリエンテーション、シンポジウム・フォーラム・ワークショップ等の企画・実施、「学生による授業改善アンケート」の実施・改善、アンケート結果の集計・分析、GPAの活用方法の検討と提案、HP・FDニュース・関連冊子(FDハンドブック・学習支援ハンドブック、FDニュース)、e-ポートフォリオ等に関する情報収集と学習支援のあり方の検討等を行っている。今後も引続き、学士課程教育と教育の質保証という総合的な観点から入口と出口に対する接続を踏まえつつ、教育の質的向上に向けた全学的な教育支援施策の企画・開発、さらにより実効的なFDの推進と各学部等と密接した形でのFD活動の支援を行っていく予定である。

## 報告



# 「学生FDのひろば」開催



2011年2月26日(土)キャンパスプラザ京都において本学学生FDスタッフ主催の新企画「学生FDのひろば」が開催されました。当日は関西圏の大学を中心に10大学47名(学生34名、教職員13名)の参加がありました。

2009年夏から始めている「学生FDサミット」は、学生FDの経験を問わず、関心のある学生・教職員に広く開かれた場ですが、今回の「ひろば」はサミットを契機にすでに学生FDに取り組んでいる各大学の活動交流と課題の共有をはかることが目的でした。

まず初めに各大学の取り組み紹介が行われ、その後、学生・教職員混合の6グループに分かれて「私の大学生生活」「どのような学生FD活動



ができるか?」というテーマのもと、しゃべり場・ラベルワークが行われましたが、サミットに比べて経験者が多いため、しゃべり場もラベルワークも最初からレベルの高い白熱した議論が

交わされました。

最後に、しゃべり場・ラベルワークの結論をグループごとに発表しましたが、「今後どのような学生FD活動ができるか?」という問いに対して、



各グループは様々な視点から独自の結論を導き出しました。それぞれのグループで視点は違いましたが、導き出された結論はどのグループも学生FDをどのように広めていくかという点で共通している部分が多く、学生FD活動を進めていく上での課題を改めて認識し、共有することができました。また、「学生FD活動の今後」について、同じ目標を持っている大学同士で深く議論することで、お互いの結束を高めることもできたのではないかと思います。

## 2010年度 教育開発推進機構 主催イベント一覧

教員設備説明会	衣笠 4/5(火)、7(水)、9/22(水)
	BKC 4/2(金)、6(火)、9/24(金)
ES研修	衣笠 4/15(木)、22(木)、27(火)、9/28(火)、30(木)
	BKC 4/14(水)、23(金)、30(金)、9/27(月)、29(水)
Webコースツール講習会	4/14(水)、15(木)、16(金)、19(月)、20(火) ※衣笠・BKCともに開催
第1回教学IRセミナー 「アメリカ高等教育におけるIRの展開」	4/20(火) ※3キャンパスTV会議中継
新任教員対象FDプログラム	5/8(土):オリエンテーション
	7/3(土)、8/5(木)、9/20(月・祝)、21(火)、11/20(土)、 1/29(土):WS(ワークショップ)
	5/8(土)、8/5(木)、11/20(土)・21(日) :TP(ティーチング・ポートフォリオ)作成演習

学生FDサミット・2010夏	8/28(土)、29(日)
立命館大学・山形大学 学生交流2010	9/2(木)~5(日)、9/23(木)~26(日)
第2回教学IRセミナー 「『学びの実態調査』からみえるもの」	9/21(火) ※3キャンパスTV会議中継
立命館大学・山形大学 2010年度学生交流成果報告会	12/18(土) 山形大学東京サテライト
教育実践フォーラム 「ICTを活用した アクティブラーニングの開発」	1/26(水) ※3キャンパスTV会議中継
学生FDのひろば	2/26(土) キャンパスプラザ京都
新任教員対象FDプログラム 修了式・教育GP最終報告会	3/19(土)

## 「学生FDサミット・2011夏」開催のお知らせ

立命館 FD

検索

2011年8月27日(土)~28日(日)に「学生FDサミット」を開催いたします。詳細な情報は下記のURLに随時公開いたします。

●日時: 2011年8月27日(土)~28日(日) ●場所: 立命館大学 衣笠キャンパス

学生FDスタッフのホームページ [http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/ac/itl/itl\\_fd/index.html](http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/ac/itl/itl_fd/index.html)

### FDS Report Vol.4 学生FDスタッフ活動レポート2010 発行のお知らせ

学生FDスタッフの活動紹介や、各種取組みを通じて得たことを紹介しているFDS Reportの第4弾を発行しました。2010年度に行った「授業インタビュー」、「学生FDサミット」、「他大学交流」等の取組みを中心に紹介しています。学生FDスタッフのホームページでも公開していますので、是非ご覧ください。



## 『立命館高等教育研究』第11号を発行しました

第11号での特集のテーマは「立命館の大学院教育」です。

立命館の大学院教育における取組や課題、改革の方向性などについて、さまざまな分野や立場から自由に考察頂きました。

### 目次

#### ■ 特集: 立命館の大学院教育

- 経済学研究科における英語による留学生院生教育の現状と課題 <稲葉和夫>
- 法科大学院における大学院教育の課題と展望 <市川正人>
- 「公務研究科」の挑戦 <鶴養幸雄>
- 教職大学院における教員養成の現状と課題—京都連合教職大学院の実践を中心に— <森田真樹>
- 立命館大学における理工系大学院教育の現状と課題 <深川良一>
- 大学職員からみた大学院教育の現状と課題 <中山博文>
- 立命館アジア太平洋大学 (APU) における大学院教育 (アジア太平洋研究科) について <山神進>
- 学生授業評価の全般的満足度の属性要因について <横山研治、アイエメンギツ>

#### ■ 論文

- 海外体験学習による社会的インパクト—大学教育におけるサービラーニングと国際協力活動— <藤山一郎>
- 「学力低下論争」を振り返って—「現代の教育」の講義と受講生との議論から— <沖裕貴>
- 大学における内部質保証の実現に向けた取り組み—自己点検・評価活動および教員改善活動の現実と課題— <宮浦崇、山田勉、鳥居朋子、青山佳世>
- 大学生における学習スタイルの違いと学習成果 <岡田有司、鳥居朋子、宮浦崇、青山佳世、松村初、中野正也、吉岡路>

#### ■ 実践研究

- プロジェクト学習 (PBL) の授業設計・実践における背景理論とその評価 —「環境・デザイン実習」の実践を通して— <八重樫文、佐藤圭輔>

#### ■ 報告

- 自然現象の可視化—親子理科実験教室から学ぶ— <山下芳樹、坂東昌子、石尾広武、上田倫也、川村康文、前直弘>
- 「ヨーロッパ大学協会」の視察結果から大学評価の在り方を問う <安岡高志、金剛理恵、宮浦崇、井上史子、林徳治>



本紀要を希望される方は、教育開発推進機構までお問い合わせいただければ、お送りいたします。著作権の承諾を受けた論文は教育開発推進機構ホームページでも公開しています。なお、第12号についての原稿募集も行っていますので、詳しくは下記ホームページをご確認ください。